

## さあ 幼稚園よ



依田 満寿美

よいしょと立ち上がり、一步二歩とおぼつかない足どりで歩きはじめた子どもを見て、胸がいっぱいになったのはついでこの間のことでしたのに、その子どもがことしは幼稚園へ通い出すことになりました。子どもの成長につれてもたらされる事柄に一喜一憂し、子どもに育てられ、教えられしている私ですが、ことさら、ひとりめの子ども入園は、重大な出来事です。きょうはその入園前後の母と子がどのように過し、何を考え感じているのかということをお話してみようと思います。

夏も過ぎ秋風が立ちはじめると、来春から子どもを二年保育の幼稚園へ遣ろうかしらと思っている母親は、その幼稚園のことが気になり出します。そして子どもにとって幼稚園は何故必要なかと自問自答しながら、子どもにふさわしい幼稚園を求め歩きます。子どもも同年齢の近所の友だちの刺激をうけ、自分も幼稚園というところへ行ってみたいと思うようになりまます。秋の終りには喜んで通えそうな幼稚園が決まります。(入園後数週間経たいま、毎日楽しみに通い、いきいきした顔で戻る子どもの様子を見るにつけ、息子にふさわしい幼稚園にめぐりあえたのだと思うのです) この段階で

は、来春からの生活をあれこれ想像し、いままでのようなんびりした生活ぶりではいけないのだと思いはじめます。一方まだまだ大丈夫、年が明けてから生活ぶりを改めればよいから、出来るだけ長く制約の少ないのんびりとした生活を享受しようと考えます。

四年数か月という月日は、途中、もうひとりの子ども(妹)が加わり、又海外生活から日本の生活へという大移動こそありましたが、子どもの様子を見、こちらの都合と見あわせながらの昼間の母と子の生活は、比較的自由で時間に縛られることのないものでした。ところが春からは、そうはいかないのです。これは家庭生活の大変革です。母親は心のうちにひとり春の日に思いを馳せ、緊張感を覚えます。一方子どもには努めて、緊張感や期待を抱かせないようにするのですが、言葉に伝わって行くのでしよう、子ども自身も暖かくなったら幼稚園に行けるのだと、漠然と幼稚園というところを心に描き、胸をふくらませはじめます。「まあくんも春になったら幼稚園に行くのね。僕も幼稚園に行くんだよ。あやちゃんには二歳だからまだだよ、四歳になったら行けるんだよ。バスに乗って行くんだよ」と。

年が改まると母親は、この三か月の準備期間に実際どのよ

うに過ごしたらいいのかを考えはじめます。「朝早く起きれないといけなからもう寝ようね」と言葉かけ、早寝早起の習慣をつけることを心がけます。二月に入るとより具体的な時間を考えはじめます。すなわち、園には9時までに行かれるように―それには8時32分のバスに乗れるように―8時15分には余裕をもって家を出られるように―そのためには何時に子どもが目覚められればよいか―前夜何時までに床に入るべきか、と。又どのようにいまの生活の流れを幼稚園へ通うための生活の流れに無理なく徐々に変化させていけばいいのだろうかというようにです。

いままでの子どもたちの生活の流れを一変させることなく新しい生活の考えをつくり出すために、あるがままの日頃の生活を時計を見あわせながら、六日間記録して、家族の平常生活のパターンをとり出してみようとしてみました。あるがままの生活、平常生活と申しましたが、厳密に言えば二月の子どもの生活記録に半年前の彼らのものとはちがってきています。つまり、秋から暮にかけての母親の心がまえが無意識的に子どもらをブッシュし、変化を起こさせていると思われるからです。二月二、三週の六日間の記録の中から一日をと

り出してみました。

2月6日(晴)

前夜 M(♂4歳3ヵ月) A(♀2歳7ヵ月)とも8時15分  
分にベットに入る。

6:30 M 目覚め自分でガウンを着て食堂へ出てくる。スト  
ブにあたってから食卓につき朝食をはじめ。

6:55 M 「バイバイ」と出勤のパバを見送る。

7:00 M 朝食の残りを食べ終え、カップと皿をみせながら  
「みんな食べちゃったよ」という。

7:15 M 「ママ、ウンチ」と訴えて「トイレ」へ行く。

7:20 M かがに用意されているTシャツ、ズボン、セーター  
を自分で着替えM 「Aちゃん起きなさいよ」と起こ  
しに行くが、Aは眠っている。

7:40 M 大好きなぬいぐるみの犬を抱いてラジオの天気予報  
を聞く。M 「ママ、きょう雨だって、お洗濯どうす  
る? ドライヤーで乾かせばいいや。ストーブでも  
いいや。ドライヤーとストーブで乾かせばすぐ乾い  
てしまうよ。おふとも乾かせばいいや。おしっこ  
ちびつてもストーブで乾かせばすぐフワフワになる

ね」母「えっ? M君したの?」M 「ちがうよ、ヤ  
スヒロちゃん(ぬいぐるみの犬の名)だよ」櫛をも  
ってきてぬいぐるみの手を梳く。

8:00 M ぬいぐるみをつかってAを起こしに行く。

A 目覚め食堂へ出てくる。Aのシャベルでほいほの  
歌をうたっている。

8:10 母Aの着替えを済ませる

8:20 母Aの朝食の世話

M 「M君遊んでくるよ」と子どもの部屋へ行く。戸外  
を見ながら歌をうたっている。四輪車に乗って食堂  
へくる。「Aちゃんにももってきてあげたよ」とト  
ラックを示す。

8:30 M 母に四輪車とトラックをひもでつないでほしいとた  
のむ。

A Mをみながら朝食を続ける。M 「Aちゃんのつなげ  
てあげるね」と話しかける。

A 「(紅茶が)あついよー、フワフワして」

M 「Aちゃん早く遊ばないかなー」と話をしながらA  
を待つ

8:40 M 「ママ、ウンさんが欲しいね、ミルクがジュジュと

出るから。ウンチは僕がきれいにしてあげるから。

シャベルでウンチとってトイレで流せばいいよ。チイはバケツに入れトイレにジャツと流せばいいでしょ。ミルク飲めるもォ」母「そうね」と合つちをうつ。M「ヤギのミルクも飲みたいね、ヤギを飼えばいいや、馬のミルクも飲みたいなあ」

A「おナス好きかしら（ナスは、M、Aの嫌いなものとなつている）チェリーも好きかしら、チョコレイトも好きかしら」

M子どもの部屋へ行こうとして「ねえママ見てて、ト  
ラックがまがると（ひもでつないだ）うしろの車も  
ひとりでまがるよねえ」母「そうね、見えるわよ」  
M「こつちにきて見てよ」母 Mの方へ見に行こう  
とすると、A「Aちゃんも抱っこ」母 Aを抱いて  
見に行く。母 Mに「Aちゃんも乗せて、乗つてい  
いでしょ」と頼む。

M「いいよ」A「いやだ、Aちゃんおなか痛いもん」  
母「じゃ、ベットで寝なさい」A「いやだもん」  
8.45 母ベットのそばで「お人形さんまだ寝てたわよ」とA  
に示す。Aさっと人形を取る。Mもやってきてベビ

ー人形を探す。おもちゃ箱からぬいぐるみを取り出し、ベットの上段にぬいぐるみを載せM、A、二人で遊び出す。母は食堂のあと片付けに行く。

9.05 M食堂にとんで来て「ママー、フィッシングするの、大きなクジラ釣るの」「わあいクジラだ」と言いながらベッドに戻る。ベッドから「ママ、大きなクジラとサメ釣ったよ。ほら見て。クジラは58センチでサメは20センチだよ。大きいな重いな」と呼ぶ。

Mベッドからおり「クジラ、クジラ逃がしちゃお」といいながら本棚のところへ行く。魚図鑑を探し見せに来る。「ママ 出てるよ、これがサメでしょ」

9.15 A「ママ、チイ」と訴える。トイレへ連れて行く。すぐその後でM「チイ」といい、自分で用をたす。M再び魚図鑑に見いる。ヒラメを見つける。

母Mに「ヒラメは）こちらが白くて、こちらが黒いでしょ」と注意を促すが、興味を示さない。Aはそれをきき「Aちゃんの本にも出た」とさっそく本棚からA所有の本を持つてくる。Aも自分の本に見いる。

以上は、代表的な一日ですが、他の五日間もこのように、おもむくままの行動が連なっていくます。六日間の記録をとおしてみていますと実に多くのことがわかってくるようになります。

子どもと生活しながら家事を進めながらの記録に、苦痛を感じさせましたが、いろいろなことを考えさせてくれる大切な資料となりました。ここでわかったことを目安にして、新しい生活の流れを考えることができるのではないかと思われま。

(1) Mは夜平均して10時間50分眠ると朝快い目覚めができ、Aはそれより50分以上多く眠る必要があります。2歳半のAにはまだ昼寝が必要なかもしれませんが、兄妹で遊んでいるとその機会を逸してしまふのです。夜も同様で、ひと足早く寝せるということも出来ません。

(2) 朝食に要する時間は食欲のあるときは15分程ですが、さもないと30分近く必要。

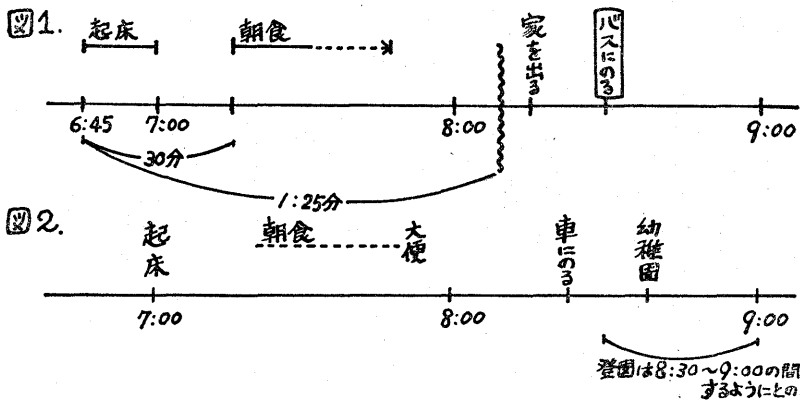
(3) 遊びは模索的な時期を30分から1時間経て、定着したものにうつて行くようです。定着した遊びは起床後1時間25分以後、1時間45分から2時間半にも及び展開してゆきます。

(4) Aは目覚めにつまづくと一日の生活の軌道にうまくのれなようです。

これらのことを念頭におき、朝の準備をスムーズに、しかもあとに続く一日の活動(遊び)が抵抗なく発展していくようなペースを具体的に考えてみました。

幼稚園へ子どもを送り出す側の親は、子どもの体調に気づかうことはもちろんのこと、その精神面においても快く登園できるように配慮をしてやりたいものと思います。起床後の余裕のある時間から、幼稚園での子どもの精神をつぎ込んだ充実した活動のエネルギーが生まれるものと思います。Mの場合、起床後平均して1時間25分後に模索的な遊びを経て、定着した内面を充たすような遊びが展開すると前にのべましたが、この1時間25分という目安と、本数の少ない中から選んだバスの時刻8時32分を基準に次頁図一のタイムテーブルを考えてみました。—その場のあらゆる条件に左右され、生活の流れは日により変動のあるものですが平均的なパターンを見つけることは、あなたが無意味なこととも思われません。四月までの準備期間には、このタイムテーブルの目安を心の隅にとどめ、比較的確のんびりと過せました。

いよいよ幼稚園通いの生活がはじまります。二か月前に得



た目安をよりどころとして、余裕をもって準備していたこともあり、順調に新しい生活の流れにのり変えてゆることができたと思われまふ。さらに受け入れ側の幼稚園の配慮が、一週、二週、三週と週単位で徐々に無理なく、その生活の流れを変えさせたと思われます。たとえば、第一週目約30名のクラスの子どもは二班にわけられ、8時半から10時と10時半から12時と二部保育されたのです。初めて集団生活にとび込む子どもらにとって、

この段階的な方法は、効果があつたのではないかしらと想像しています。とくに遠くから通うMの場合、後半グループに配属されたのが、幸いであつたと思われまふ。7週目に入つた今日、水、土曜日を除く毎日お弁当をもって出かけ、年長組の子どもたちと同じ時間を幼稚園で過ごすようになりました。Mにとって幼稚園は楽しいところであるように見受けられます。

入園後、4、5週目にとつた8日間の朝の記録をもとに、再び平均的なパターンを書いてみましょう。上記図二に示すものです。

7週目に入ったいま私が心がけていますことは、

(1) 7時には目覚めを促すこと

(2) 8時には「さあ、幼稚園よ」と子どもの心を幼稚園へ向けさせる言葉がけをすること

(3) 8時までは自主的な行動を待つて子どものやりたいようにさせること

(4) いままで不可能だった、Aと二人だけの時間を大切に過ごすこと

の4点です。

最後に、こんな日が毎日続いたらいいな、という思いを込

め、7週目のある日の子どもの様子を見ていたかどうかと思  
います。

5月26日(曇)

前夜、MとAは音楽を聴きながら床に入る。

6:30 Mもそもそ起き出し「M君おしっこ」

母「おりこうさん、早くいかなくちや」

6:40 M自分でダンスからTシャツ、シャツ、半ズボンを取  
り出し着替えるM「きょうは半ズボンがいいや」母  
「まあ、ひとりのできるのね、いい子ね、シャツ着  
てるの?」とシャツの下に、下着を着ているのを確  
かめる。

M半ズボンをはきながら食堂へ出てくる。パパのおみ  
やげを食卓にみつけ、寝室へ持っていき、パパに話  
しかける。「ゆ、ず、も、ち、」と箱を読んでから、  
「しりもちだよ」と思いつく。食堂へきて「ママしり  
もちだよ」と発見したときのような笑みをうかべて  
報告、Aのベットへ行き「Aちゃん パパのおみや  
げよ、しりもちだよ」とやさしく声をかけている。

A「目覚める」M、A、連れだつて食堂へ。A快い顔つ

き。母「Aちゃんも起きてたのね。おはよう」

7:00 M「食卓につく」

Mバターつきパンに自分でハチミツをつける。パパに  
たれるよと注意される。

A「Aちゃんはピーナッツバターがいい」冷蔵庫から  
出してもらおうと自分でスプーンをとりパンにつけ  
る。

7:20 父が身支度をするために食卓を離れると、子どもたち  
も「もういいの」といって椅子からおおりる。レタス  
のみ残す。

7:40 M A、「パパ、バイバイ」と見送る。

M幼稚園バックをもってきて食堂で出来上がったお弁  
当を入れる。カップをナプキンで包んで入れる。母  
はし箱と歯ブラシを渡してやる。

M「M君、おなまえとリボンをつけなくちや」とい  
い、名ふだと方面別のリボンを探して、これも自分  
でつけている。

7:50 M「ウンチにいかなくちや」と言いトイレへ

母Aに着替をする。

M「ママ出たよ」と呼ぶ。母、トイレへ行き、Mの

世話。齒に食物がついているのに気づき指でとろうとする。「こんなのがついているよ」と見せる。(齒みがきに気づいたらしい)

M (いつも齒みがきは夜だけなのに) 今朝は自主的に齒をみがく、洗面所に水をため、タオルを浸して

顔を洗う。

母「きょうは顔も洗ったのね」と乾いたタオルで顔をぬぐう。Aの着替えを済ます。

8:00 M帽子を所定の場所からとって食堂へ。

母Aにくつ下をわたし「はきなさい」と促す。

M出されていたくつ下を自分ではく。

8:15 M玄関にて靴を出してはくA (前日洗った靴をみて)「わあ新しいのだ」といひはき、二人そろって家を出る。車に乗り込む。(意を決して4週目から私の運転による車で送迎することにしました)

8:25 出発

幼稚園近くの車の中で、M「きょうは、僕一番かな、三番かな」母「そうね、きょうは早いからまだお友だち少ししか来ていなかもね」

幼稚園の百メートル程手前、通園児が見えたので

「じゃ今日はこの辺で降りて、歩いて行きなさい。気をつけてね」といって降ろす。

M (落着いた顔つきをして)「じゃいってくるからね、バイバイ」歩き出す。Mは途中からかけ出し園に消える。

母車をとめ、Mが園に入るのを見とどける。「じゃAちゃんおうちに帰りましょうね」Aと二人だけの数時間が始まる。

